シンポジウム全体へのコメント

高橋正明

今回の国際シンポジウムはその表題に「トランスナショナル／トランスカルチュラルな比較地域研究」を掲げた。それというのも、グローバル化の下で急速に進行している多言語・多文化状況を的確に把握するためには従来の地域研究が立脚していた静的な「地域（area）」認識では不十分ではないかとの問題意識があったからである。テッサ・モーリスースズキ氏は基調講演でこの課題に正面から取り組み、人間の活動こそが「地域」を作り出すとの観点に立って、ヒト・モノ・思想のさまざまな「流れ」と「渦」に注目することでよりダイナミックに「地域」を把握することができるのではないかとのきわめて示唆に富む提案を行った。

他方、分科会での発表について言えば、そのほとんどが国民国家の枠組み内での分析にとどまっていたというのが正直なところであり、その限りでは今回のシンポは看板倒れだったと言えなくもない。しかし、グローバル化にもかかわらず現在の多言語・多文化状況が国民国家を主要な場として生成していることも事実であり、それらの事例を比較検討して差異や共通性に光を当てる作業もいまだ有効性を失っていないだろう。いや、テッサ・モーリスースズキ氏自身、「反地域研究 ―アメリカ的アプローチへの批判―」（『地域研究』2005 年）と題する別の論文において、「主だったグローバルな力を、可能な限り遠く離れた様々な地点から観察することを目指す『反地域研究』の試み」をむしろ新しい研究の選択肢として提唱している。多言語・多文化状況の解明という共通のテーマを軸に、さまざまな地域・専門分野の研究者がこれまでの地域研究・専門研究で培ってきた知識や技術を最大限活用しながら共同研究を推進していく。これもまた別の意味での「トランスナショナル／トランスカルチュラルな比較地域研究」として今後追求していくべき課題なのではなかろうか。